鷹三百首

862
156

国立国会図書館　タイトル『鷹三百首』 請求記号 862-156

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『鷹三百首』 請求記号 862-156

ガラス使用

862-156

鷹三百首

春

定家卿

帝國圖書館

国立国会図書館　タイトル『鷹三百首』　請求記号 862-156

ガラス使用

着鷹の行ふるゝ山里の梅のちかけのあらなん
鷹の鼻の如あらまの毛の如まへ
春山のまゝ飛ぶしき鶴ゆきに鷹の鳴こゑ出るたらひ
ない鷹の事を鳴すへ鷹の如きうひ
目新きを春蟹の雪の鶴なるは鳴すへとく鷹やたまし
義なし鳴すへ鷹の事へ
春の日もかまをいてゐる武蔵蟹に遠山もある鷹とすへ
東国より里鷹と上を待に若鷹の毛を出すといふ
又鷹屋出くの毛とも云なり
みゝ草に折りくせた春待ちたきに尾もさゝ鶴の不如かり
継尾ハ悪しらをと云ふに草と云ふ人鶴兵とハ

小てきる如くの兵の事とこへ
春の蟹の鷹も金の洛とした鷹の目ともむ多き黄に有
鷹にこゝ仕く居て玉とうむ鷹あり里目といむ所は
鷹のかたに玉とうむ所の所は黄多あると云とあり
私或説に春の如く鷹と金鷹と云ふ二のまゝハさすの
よせ也
鳴鷹を東鳴ふ春待胡鷹にすのこゝして出れかり人
胡鷹に張まり洛かなれも雉の志る間雉に志ら
せしとくの事を樺(カバ)と細あしくさすを洛のこと
云ふ里
かまゝ衣にはまゝ河とひとゝゆゑ雉ハ川山の鷹の如くへ

春の日はかすみあれば鷹雖無心もなく飛て見もはんべ
雖無心もなくとは無心なるにあらざる
事也

去は日の水をひいつる着鷹やんなくてもぬすむとする
鷹人をそく来る間はそひと云へ

霞はしも常をてしも去の日はそこび尾の鷹やまはし
舞心者見ひ尾をは蟻へ賜尾と云とこのひと

去の鷹はめ鷹はきする着はのをはかすきや近くぬん
大鷹はめと鷹を好むこと能々去はれるをかは

りはかり女鷹をうへはれとも鷹とをとをぬよりてなり
去まれ志しは可尋之

鷹三年にはまれ所かけ鷹の不ろ〻并り法きし後なくへ
雉鷹をはる一鷹とすべて打鷹はも山あもきし後なくなり

去の鷹はの鷹は去はかし日の蓄て中鷹をとりはかは遠
三首第かし但はかし日の而を可尋知

あしはの小山へ里はあし鷹とりさきてぬれは去はぬ程く
二月三月は出るを小山へ里はいへはいふとをうをぬ事
とりそこのかと云かり

去山の霞はけし毛かのくとは此月はいかなりしひ
四ツ毛の四さはあはと毛といふなり

春の日は長さと云ふ道理の末つき鷹や鳥を見ぬん
末つき鷹とは諸鷹の事也
箸鷹のめしは珍をおもひ如ハ様なりする人やみるらん
其理は小鷹とはふ事を知らさて居て鳥を
食とハ鷹同ハ見付を様なりする人なのみんとん
其は理は書意するや犬鶴のちの山あらは雑子なるん
箸なし日を里可尋
箸鷹のまゝ無まする次の浦は蜑のさへはる鳥は蔵草
箸なし
子ハ何まゝ御りにけし巣ふしはるゝ山の鷹は志けさすれ
可尋

其ぬかゝ木は此にかゝる鷹の名は其とさハしく松内をふく
木は右に無鷹は名と云ふを可尋
鶴のわく志中の毛は作き目も當てや雑の足はさらまし
足に長さ毛のまゝといふらん
目は其の山てふ山にかゝる巣に白鷹の子はなるかゝ聞ん
白鷹志の死は可尋白き子とうむを頂上とす
則是諏訪の明神とも云ふらん
其ぬかゝ日やきハ近くなる鷹は如ふのこれ云る雑子に
夏の近く水とゝやきハ云ふ夜雨てこれ如きを
云る雑子と云ふらん
こぬけ此諸ゝ山の鷹ハ巣ふしはし隙なくも忍をうけて見て

森の中とあらへつゝこらへ分けせよありくを
こぬけと云こゝ里菓ゆゑ口はかいとりけるん
のんとなり
毋鷹のまて子のかいこあらめてかつりこそまれ人の志ゆゑ
義かし
同毋のあらめなかしかへ雨子ゆゑとりにかゝ生体ぬらん
下鷹
春ふつき花火の蛇鳥といくかまてかゝ鷹と云ふまいまし
義かし
ゑきハ本まれかひてかゝ川岩鷹ゆゑりてそすむ鎌倉ゆゑ里
鷹の中ゆゑ栖とかゝへしの里といふ人ゆゑ鷹と

鷹ゆゑ鶴ハ東夕まは西とかり狩狗かいてハなり
可尋
生れつる日やかりけん春よりも当りたてゝる鷹ゆゑ菓ゆゑ里
守立るハ鷹の菓と当ゆゑ人の事ゑ菓まさりとハ
菓ゆゑ中まてもよく鷹の事ゑ
着たかゆゑ旦かつる山の伴弓春はたつよく鳥やひかゝ雨し
我々の山とへ行と旦かつると云ゆゑ
鷹鋼のとける道目の見如祖ハ世臣や鳥のいゆらなるん
遠見と道目と云ゑ二ヒこと京よハ左と目と云ゑ
松夜や梅よつけはさかゆゑ姫のよりゆゑ牧見てゆゑりゆゑ人
さかゆゑ春ゆゑ鷹の熱名なり

夏部

ことしハ嘴つき若鷹やさしきハ清くなあらん

若たかハ赤府とも云やすて白くなかるなり之

春まてハりきはるめと若鷹のよしけるハめくりとそ見

春ハめくりといふハ毛かハりしことや入ひとて

鳥飼ハ是と云ハ飼とす之

鳥屋にいるハ八日未卯の日なしやる鷹に羽虫なまれん

卯月八日に入て七月廿四日に出るを鳥屋へ入は

若く新と飼なり出てけのおもとかむしの

無ふる飼なり

夏飼の鳥屋かり肉なるはすハ毛と春の鷹とはなりけり

かりの羽ハ白く出る毛と云ふハ毛と云之

鶉と鳥屋に入るは夏山にかなはするや鳥かはもらん

山鶯但鶉と山にもはるにさむらんの教之

若鷹の尾花ちるは鳥屋の内に秋もみえを見えん

尾花とハ身を羽にて腹にある毛と云之

夜ひの鳥屋にときすゝる見ろ板の新タ鷹かぜとつく

見ろ板とハ鳥屋の内に置く餌と飼板之に付

云ふハ鳥屋の内に水となして古き飼とかり

ひなつさんへのみく

み山木の梢とたにも見えてもわろさて巣まいりのたか

新に餌とかいて巣にあると云へれも後にハ巣

と云ふ也

最かひのもかはやなる水きはや非鳥の志しぬ後なりけん
すかはとや不知可得之

武士のかりかひの毛や母鷹の巣まきりに忍をかけて捉ん
ほろほひのけとはうしろのかりかはや事之母衣巣
まさゝ見鷹の事之

くれは鷹あやめも忍しぬさ月毛はいはほと鷹はたかなれん
面にはさまさ毛なるをすべてあら四まも毛とかなる
二十附鷹やへ入間之鷹屋へ入まは穏かなる毛之

むしろ山下行水の夜ふかゝ鷹にふ忍をひさしてをとく
むし鷹やとく出まてぬりまいしるを氷室山と云之

具中へ植とかけて水と入間とかけ水と云之

最かひの鷹屋へかけなる羌鷹にひさ鷹見せてくるまかな
いまかし

夜ふかゝ鷹の鷹屋なる水浅にさてもや人の同忍ふらん
鷹屋の附分鎖なきわなるに後ゝ鷹を引して
鎖へさ鷹を水にかゝりして鎖へ青回より鷹
とのかするにも鎖なけまは是を鎖事ありと云之

嫁迎き鷹やの垣かのタかれひしやく花なる尾やいさゝ海
尾のはされはまとひしやく花といふ之

日や鷹の胸れひこに見しはるはくるの毛とや相撲れん
胸に鎖とゆく胸とふくらけるかの毛とくるを毛と云

巣わかしの鳥や此内より手習に心さしてや石をとるらん
鳥屋の内へ親鷹か石と入くゝ小きしする之所と
こゝかせんの敬之
若鷹の孫ひしの雪とふこゝしき鳥やの内より雪やまぬらん
ひこ毛こゝ鳥やの内に雪をちらしてもるゝ之
若鷹此毛のはめかしぬこやひも秋と待てやせん出もらん
義明し
こやの内此お花生の毛やみちれの三の山の巣鷹なん
方かし相こゝ服に毛こするといふ里思山
を一入にや

炼部

鷹は鳥屋すると袋にいるよりまたはし翅と秋にかけ
鳥屋に以重るより語もいらぬ鳥屋なる名袋に
細ほるかへ御しか炼にかりて鳥屋と出し語とも
名出にせしの心之
天河に蟹にいるかり人をいこ星とも見るへつりまる
鷹司の下手を鷹星といふと之
秋の蟹此雪立御しかむら雨に若鷹の毛をわかひ出し
秋も霙のふるに遠山に拙しきる毛をわかひ出を
心とこ不審程可尋
巣わかし此神鳥や出しの若鷹をすそのみかりに三里やかはし
生わかしは表とこ諏訪の贄鷹に備る之必鳥屋

国立国会図書館　タイトル『鷹三百首』 請求記号 862-156
ガラス使用

の鷹とし

鳥屋出しの一羽も去年のもなしそき足革さして鷹に近し
足革さしも刑とも毛なしそしと云へ

秋のこしらるを忘れ忘れひてや夕の鷹は小しへゆくらん
秋の来かたは西なる鷹も夕は西へゆくし鷹と
失く見るかも夕去にたれは西と見るかへ

かりそめくわやの鷹は みさ山にかまいや小さや鷹なるへ
鶴屋にて諏訪のみさ山祭に鷹の穂にて作る
なるへかま隼とて羽さしに飛ありて鳥を切て口
と云へ稀めして右鷹をする君贄鷹にも備へ

去年より鷹は鳥や雨よりするかへ足かりけ来の秋を出しき

鳥屋へ入て狩よく如と鳥やまさ里と云へ
かつ里とは春にかの来へ

山鳥つこ雲（雪イ）の様雪にめくしぬとはる秋のまけにか
口とはは鷹は夜にありなとて遠見の云といふへ
雪不寄他本可見合

よしはしの二なけれは秋の小雨にあり鷹の浄土なるへ
浄土義云狩可尋

箸鷹の志れしの、かし志雪はるは、わたはしかても本ぬやるへ
志れしのかし志とは鷹のかしに尋るし志を云へ
鷹とよふし志へ但志れしの字不寄と云へ狩可尋
鶴小鷹とはかしくと呼ぶり大鷹とはかしくと呼へ

あまる鳥屋ふませそくしたるは古ひ[illegible]の若鷹
古ひじに似るとはよく鷹の事ん[illegible]
よかしんのふとこ
心ゆはいまてしゆきとかふだのおかれ[illegible]
おかれとはゆるりくとおかれの事ん小羽とは左右
ちらくとゆく羽の袖と云ん
はし鷹の左羽右羽にふしたる木ふけき[illegible]の山はしき草
左羽右羽は逸羽の羽を云ん
姉山の木下かりはみ枝とも犬のあるとしるまてそしらか
木下狩とはせこの事ん犬のあるとは犬の夢まて
知るとく

ヨこけいの三けきにしるし山秋のすへ鷹人のいらぬ山とは
鳥呼とは鳥よくとしけく云は鳥はれわき成ん
又鷹人のいらぬ山と云しかしこと
何ら鷹のかなく里にとす鳥は毛を喰てけ秋の山の鳥
ちらふそ鳥とかんとすれはうけまつしてゆきは毛花の
散を遣しかしそ鷹はかなくなれてけるると云ん
姉の蟹は袋をかくせる箸をうはれまきてしそ鳥は[illegible]
[illegible]と鷹の足はすぐにすせそこ箸の中へ落て云ん
箸の[illegible]と禱とすあり
秋の蟹は菓の三けきをすへあらはんさへたの鳥をうはし
鳥を[illegible]鷹をすくひあらるんへさへとこの[illegible]

国立国会図書館　タイトル『鷹三百首』 請求記号 862-156
ガラス使用

雨さはくさまる一よりと鷹人のいはしにくるまし秋の日ぬけ
妹ハ短日なれハ之但いくよりもあいせしなる
妹の田にかるてふ稲のりと雀忍とことしとや鷹にふかん
たかの姫に紫色にあらしてうつハいゆるゝ
河屋にはなく代の組鷹ハ田面の鳥にならひてそなる
鴨鷹のいとゝ之をとる鳥に並て居るを鳥代
只云之鶴をはなつ前に鶴毋と云もしんとゝ
そしたかの木ゐる雉のおもはり鼻つきぬる忍のこ犬を
鷹ハはつて鳥斗落さる事之かゝはつぬ犬と鼻
付かぬるとゝ代も忍のこ犬をはいゝ
鳥屋出せ東に只とせかる岩鷹の日次(ツギ)のはりい河の時代より

諏訪の時は年末の日をはかはれハ平人の様に
此日を踏之をはと日次と云之
弱はなく小田のかしてぬかしら河に鷹に鳥を草にはしん
かしら河に不知可鼻之草にはしんとハはしら鳥
此事之鷹ハはつて鳥此草にある事之是をぬ
なしとも云ふ
秋の日ハさしつよりに雪ぬへしいはしもなき犬の毛や里
犬の毛や里にはせる糧とて鶉にある事之毛やりとハ
夜ふかく刻事之秋ハ短日なれハ糧をはぬよとゝ
隼と二基はしをあらせはる古河のつれ蜘のうりまうき
河とはしに二ツ鷹ひとくありとゝ

国立国会図書館　タイトル『鷹三百首』 請求記号 862-156

ガラス使用

鳥屋出るうつき毛の鷹に鉢ゟ相や去て来れ歳府の名鉢如ん
かさ毛とハ片鳥屋の事とし
あら犬の鷹にうつ鳥を打のけさきだしてゆる聖への持人
犬ハ鷹と云相なれいへさばきとハ外り縄のす
秋迄くなにゆ明小山田の稲葉もそよとゆり鳥めのたゞ
かり鉢を田に至鶉の事とし百首に委
秋のゝ鉢おそ花の波とはさきたてゝ鳥を鳥やとゆん
兎も大鷹の元鳥の内とし

冬部

秋よりも見し面ゆけもかりゆぬくちゆひてハ鷹はのるし
ぬくちゆしとはくいせを鉢事し鷹の大きに鉢を
はのるとし
産(ウブ)まへと心得くせよ箸鷹の鉢とのれとよいくさしハ見てはし
うぶすへとハ三里かゝぬと云し下の句の心ハ山を出し
より鍾のよすき鷹の事ををのれとよいくとし
何ら鷹の首所はくはゞ出鉢ともあ鉢ひてそう鳥(シ)閉むるこて
出鉢とハ洗鉢の事し閉むるにこてとハ志むき
うるといふ心し
れよ忍とまさ当なれぬあら鷹に口鉢見せて宝ゆりん
笑かし

国立国会図書館　タイトル『鷹三百首』 請求記号 862-156
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『鷹三百首』　請求記号 862-156
ガラス使用

山ゐしと云は夢縄ぬくにけらと云下句は山大尾と
云ふは行かくくぶと入はん
三りかゝぬ事もあると何ゝ鷹のとりしとともこせる忍袋
をさしとはとき口高事之餌袋は付はといはぬさ
すいこ云掛くとなり
所安くとき忍は付くまいに佐心ゆるすれなくもなき鷹
所屋すくとは却しとよへはまゝ心ゆるなりきたる
鷹の事之なき鷹といはなりぬ鷹の事之
何ゝ鷹の羽ほとはは手のさきのはやあまりいとして木ゐと云
羽か雪てもほかきかきはあまりいとも掛くとも
若鷹のくびのあまりはすかくりを口やをひてもかくやあまり

まかくる毛こはくびまいりは赤毛の事之
いふして何とあれはやあり鷹と手むき丸とは名つをそめけん
報語の明神は此かはる鷹の美名之
計として糸とみせる鷹の毛の落葉衣鳥もぬひほ
尾すけ口く尾の下は五毛の計はやふるとほむる
物とし糸とみせる礼糸とく是もかめしり蓑
口と云下の句は心は鳥のまゝてありくと事と通
と云之くさ衣と蓑と云入てよめるまゝやとし
なるこの羽とひ所やこの鷹は云ひきてよしすらなるん
羽のまゝやきと同じる様なるけきの事きを云之
あれたかは新を折る山伝のとりはゆくてや木ゐとこるん

賀丹図にては放ち鉤の鷹と取ると云日本
あらくはなりきるとする鷹の事を云とし
志たかこまゝあり鷹の心にしてとりんとす候立ちなほ
閑こゝるけれは鳥とはいてしてきしかと云とし
かけ、とし業数とする大両鷹と来ねにあけつる松の下皇
閑たかけれはさぶとうけれとして来にちやくくと
云付とせこのあらくよくよれは本来にあらりて
手にはりしぬ物へ下得とはせこの事へ
かゝる人の鳥を云る造田のいぶれや鷹のあしにのるらん
造田田の事近へいきれは見彼の下にされる
不のまゝと云下手のほかふ鷹にはかありぬんと

志くし切れ死とし人のあり里国岩猿の志は
油と付くかしがいとあらしめく二六度も当れはなれるし
山鳥の石鳥はなれて網とはしひまもなこまや鳥と折れん
不知不得ゝ
隼の聖ゴる鷺もやもし鷹のとすそより松白く見ゆらん
聖とる聖あらくれ事へとすけ乱糸の事へ白物
なり
六と鷹といふことは相ふ隼の大とや犬と以へ八ゆらん
不知不尋く
鳥かく片山里の林まくたかを得るられの所ひしさ
見かし

国立国会図書館　タイトル『鷹三百首』 請求記号 862-156

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『鷹三百首』　請求記号 862-156
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『鷹三百首』　請求記号 862-156

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『鷹三百首』 請求記号 862-156
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『鷹三百首』 請求記号 862-156

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『鷹三百首』 請求記号 862-156
ガラス使用

ことすれハ元ゝ鷹の名しこする者山(ハシ)の水をつけ
餌しことは水を付くれなり
口餌ひき山前とすゝる鷹なふり腰にけしてハ鞭ゝとる
れかなりとは鞭より長き物へ長まへの時鷹を
なかりて神をせぬ為目之尚時ハ鞭とこそ俗用なへ
たかれ山のかりと如里にけれ里の犬あもそさ法れやせん
里へ鳥を追入まいさと犬をけらやせんとの目ふへ
たれの時ハ里犬をうけよと云へ
落ハ犬鷹ハむこ鳥一ツよりに二ツかきける聖へのうま人
雌をハ犬かもさむに鞭るて雄立事ありそれと
鷹か元と鞭鳥と云然時ハ二ツかきこれなれハ之

稲人のいふしてハかく鷹の口餌まゆそく丸とかふらん
元ゝる鳥をもぎて具丸と口餌ゝふハ物数さ
せんのねんに元ゝふ時ハ胸をかふ物なり
けし鷹の日ゝけ如何をハ杖なかゝ鳴るけれ山の志ゝ法
なり杖ハ樹の木をすゝるなれハ鳴るけれ
ゝ樹木を立入ゝり日数の羽不知可量云々
當ぬ口ゝ山詠を鳴る鷹人の口まゝ聖ゝ鳴ゝ鳥をもちかき
鷹人の口まゝんと相ふ志りも鳥の鳴と鳴ゝ
口ゝ鳴るを泊鳴と云へ鶉の鳴なれ口ゝ小鷹あも
此此なる事也
雨すゝる山のかりと如其ふ鳥を里より見けく出るうま人

其鷹のなし姫木鷹姫尾上まくらこそ鷹の犬や宮を見るべし
鷹も鷹も木にあれば犬も宮を見るべし
着鷹のひとひの毛をはたてかくしけれの鷹は茅かくれて
ひとひの毛には無の毛と云へ病鷹はかなしも
山毛を云るとへ
ゆる犬は心得てする分ぐひを持つてあるに鷹そうしこそ
古犬には鷹雅になれたる犬の事へ分ぐひとは
口の口傳りたる犬の事口の口傳る口は鷹を見知
てくいぬ犬を云とへ
口傳り山酒とすもむる猿人の着や鷹の忘りなりん
字訓へ義なし

答よりもおくへかこ入犬を見えてふこあり山の鷹人
あかりけりとは尾さきへはかりけり事へさうなれて
はかゝ云を嫌へふこおまと云とへ
落葉をぬれ立鷹ものひやじとしつけそけ鷹をひ羽
ぬれ立とは人に忘らせられ立すへさやうに立け
口も遠くはのひけましさ程は鷹のありやせんと
推量に猶けそしつけそけと云へとひ羽とは
鷹の鷹と云へんやうに羽のまゝ云へ
後の山鷹は淑に落にけり波に新ある鷹のみさこ羽
みさこ羽前あしこれは義なし
云はかくたひにあやうくみゆる此枠をやすする鷹の羽
りみさ

国立国会図書館　タイトル『鷹三百首』 請求記号 862-156
ガラス使用

よく学ばしたり

いつもたゞ楢その小野の柳ありまゝ狗ありまゝ犬といふ人
笛かし犬を入るゝいふと云ふ人

みかりその山の山のもとの足すへ鷹の鷹のさやるを放してそゆる
足すへ鷹とは人は足付きたる鷹は鷹と足付る
事ありこゝ時は鷹に沸かせて手放しやすとゝ

菓かりの笛の祢と里にをきかひて當ぬと沸る整のかり人
笛沸くは序へ祢とりとは口まり里所きのいふと
わかしとへ他里鉤をかふん明日よく口しせん
如ねなりをきかひと云

よめ鷹を犬とふ鷹と云かひて本の沸ひは沸るかり人

りとなつかれとは先へ祢にたゞる所へ沸る口此人
たゞふをかれとかりとは沸かれの鷹と云只鳥もかり
りとは落と云とへよめ鷹前のむこ鷹口同し
或説にとん鷹の沸かもしよ里めへ鷹の立と云へ

三陽里山名の長すかし楢より里説すも沸かく犬のすゝ者
第明し

母鷹のうち付の毛は山し栗の羽や毛かくくふなる人
か祢付のけとく嘴の口さに毛を山し栗此
羽不知不尋ゝゝ但羽は菓とかなして山栗は
序あれ以下日付そうち口は山しと沸せく付るもの
かれは左様のよせあれ

落ちくハ犬もひかせで十よりめハめとりなりも如てひつく
逸物ハ鳥の落ぬ間にこれほとに犬とひかせぬと
なり十よりめかたにハ鳥と云ふせすしてめ鳥と
ふくとくとく鷹と鷹笑しての家とく其子
細ハめ鳥ハ味よく間是に斗心をて雄とハ
とも如程に無して雌とハかたのに山の枝にハふ
とく

持人のこれふ池の水かゝ見たかれし毛も見ゆるくりり
日見うふにはに水邊をこのむとく忘しこなとれ
ともんの鳥なり里

みるものの木ぬる鷹とゝきこれて犬とを入ぬ山の下ゆを
鳥の落も見てあしてたかハ木居とこれとハ鷹を
よひ元てこれ邊に鳥ありやと犬を入ましく見ぬ
もれく

けしたかの口ハ〳〵あかれハ又すこてほこぬに見ゆる水かゝ見かな
又すこてとハ水の事ほこぬに見ゆるとハそりて
居る事ハ今こ居なる時ハたかの水に心と物さぬ
と云ひかもぬとくまつろくに居ハ水にたかの心
物まりと云ひとく

けりもの鷹へすとれけしてけり花葉の大姉ありかは
語語の贄鷹に斗 紫色の裝束とまとく
大たかの六門と持ひと落葉の鳥にかさぬるすの鳥かな

国立国会図書館　タイトル『鷹三百首』 請求記号 862-156
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『鷹三百首』 請求記号 862-156
ガラス使用

の風と法を歸のぼらしと云へ
勅めりて此筆ふりぬるくらゝ兆の鷹は鷹毛の志ぬりの塔
山家下得知云々
何ゝ鷹の尾上は雪のまゐがし鳥の足めも横やさて御
丸もしの事く丸にしまし縄をさせとく
もしたかの四毛まいまの鷹雪やとは羽なるぬ白府なるん
四毛とはうしろにあり此時こゝ四毛動くを四毛
とつるゝと云へ
猶人の弱の里毛とうつりぬ雪の志ぬ鷹うひの山
の里毛といふぬるる時無毛白きを云とく
年くの此猶にあつるもし鷹の志志すとや羽とはいはし

一志志ずとは羽うしの片かつりに二枚ほきを云へ
冬山の松に来居こゝ清青鷹と雪と見ほしや雪はうしろん
山家下得知云々
もし鷹の塔なる鳥は雪すまに袖三ゝ二ほるかり長ゝ始
なる鳥ゝは上尾の下なるを云雪すりとは無の毛を
云袖しこゝ渉る下得知云々
日ふ三ゝは御しも見ゝねゝ以者鷹の雪を御しるや大羽なるん
大羽ゝはなさ追なると云小羽ゝはよく追といふ
御しる見云なり
たかひのみよりの白雪をこゝへてもしふりもしろ
ゆかし

国立国会図書館　タイトル『鷹三百首』 請求記号 862-156
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『鷹三百首』 請求記号 862-156

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『鷹三百首』　請求記号 862-156

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『鷹三百首』 請求記号 862-156

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『鷹三百首』 請求記号 862-156
ガラス使用

見ゆらんとも義なし
十日せともいふ山へり見しなりし同しまゝ所はかんむこ鳥
十年ともへゝる程古き鷹の事とえみなし
池は可尋見合 同まゝ所可得むこ鳥前
に要めん鳥のはりまゝよりをん鳥の立事とん
あし垣のはゝ所まゝやあゝ鷹のふせ国を見はる間なりしん
ゆしきに略とゝ入りて下句可得知ゝ
たゞのねる杜に鳥とよせしとやうよといひて遠見よりしん
義なし
むし餌になる柄の都人のりしこき法代も鷹ハありけん
山方下尋知ゝ

餌となる鷹と成あし古しへの神代よりもや語をさしけん
同可得知ゝ
其金ふく吉備津法神の獄鷹や源房の法代より久りしん
同可尋知ゝ

小鷹 六十四首 [illegible]

寝ゝ所ゆけ野の水は夜ゝ鷹の志ゝ所なりしん
夜黒府とハ光とさるゆゝよこへ切る荷なる
萑鶴にある柄とん
其の野ゝ草にとり入まさしき鷹の志ゝに語やなりしん
其草のはとゝまゝりしはいへ

武蔵地の鶉に付けて引縄の所なりけれる小鷹犬なり
関東には馬上にて鷹をはなしかけるの意こそ
はなれは鷹よせざる間ひかせしと云本とあてて案
とえ引縄とは犬の中を縄の事にくらせ候
ゆゑ犬なれば鷹となるべきなり
春ふかき木下麦のかけ鶉犬とはなしかけり
木に付し鶉の事とえ西園寺流のは麦かけ
とかり池流のはひきたりとひとえ水こきせす
ゑ上の注相違え麦の陰鶉え
河内女の手引の糸の祝ひたり一より鷹をあはせてしかな
手ひきの糸とは縄猪の事とえ祝ひたりとは

毛とかふるゑ祝るとえ一よりだか
春山に帰りし鷹の巣見鶉と鷹屋より出て鉄は糸にけり
かり年の鷹をこなるにあらぬとて知るを云り
下勾義なし
細さしてまてこそいまを見とりつことや見る心也
ゑと見ばことは春元鷹の事にそれを小山へ
見とも云鶉の子とはなりまてこそとえ
み山木のうけ木に巣をかくれはやあらん西流の黒府鶉
ん西流ことゝ云にはよりまゝ鷹なしとえ見返毛を
ゆゑ鷹の鳥とはかゝ西荻の後やまたし小鷹の命なりとえ
鳥をひきはゆゑとなりとやする内の小

国立国会図書館　タイトル『鷹三百首』 請求記号 862-156
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『鷹三百首』　請求記号 862-156

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『鷹三百首』 請求記号 862-156
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『鷹三百首』 請求記号 862-156

ガラス使用

ひとりにあはせもして只すへありきて鷹に暑を
志しをなりけりてさき後にしかく暑にはたかの口
とあくらん
小山田のみそ折内にて持人のすへけたかやこれりなるらん
義なし
さゝ鷹の七十あまり二の毛やより数す里もすくれるらん
可尋知ニしさゝかたかとは早の字にれを鶴の事に
因も日もまゝこるしいやさゝかたかのとき餌をすゑて木にあるは
因こるりしはいはつはりしまして木にあるとよめ里
早鷹可尋知ニこ足も鶴の事に
あけすてしまひも落へきさゝや鷹の焉はきてゝ遠くけらん

手かつらんとせしとも焉のもりたてゝけ事に
故江の様のまゝ川菜若鷹の荻にそへてゝ鴫と付けらん
荻斗はよはき程に榜の枝とそへて付よしの教
なり

国立国会図書館　タイトル『鷹三百首』請求記号 862-156
ガラス使用

862
156

国立国会図書館　タイトル『鷹三百首』 請求記号 862-156

ガラス使用

ガラス使用
国立国会図書館　タイトル『鷹三百首』　請求記号 862-156